

挨拶のすすめ

「週末寸言」原稿 20090214

「山賤のおとがひ閉づる葎かな」、芭蕉の発句である。大して良い句とも思えないが、貞亨2年（1685）4月ごろ甲州郡内の何処かで詠んだ句である。聞けばなんとなく身内意識をそそられる。現に、都留市にある山梨県男女共同参画推進センター「ぴゅあ富士」の玄関前にはこの句碑が立っている。

芭蕉は、この2年半程前、八百屋お七の火事で江戸深川の芭蕉庵を焼け出され、秋元の国家老高山伝右衛門（俳号麩峠）の招きにあつて甲斐の谷村に半年程住んでいた。そんな関係から、彼には谷村に立ち寄る何らかの理由があったのだろう。一句は、「野ざらし紀行」の旅の帰路、東海道御殿場宿から籠坂峠を越えて甲州に入つての作である。「山賤」とは獵師や木こりなど山仕事のプロのこと。「おとがひ」はあごや口のこと、甲斐は山が深く、夏草がぼうぼうと生い茂って木こりや獵師のような山人でさえも口を固く閉ざして歩いている、と

いうのが句意である。

しかし、この解釈は、表面的に過ぎる。この句の登場人物は木こりでも獵師でもなく、街道ですれ違った土地の人で、彼らは旅人芭蕉が挨拶をして、もそれを無視して行き過ぎるばかりだった。そこで、山国甲斐の人は、「葎」が口に入るのを嫌つて「頤」を閉じ、挨拶もしないのだろうと皮肉つたのである。

筆者は、暑からず寒からず天気の良い日はオフィスまで自転車で行復13キロの道のりを通つている。田のあぜ道、川沿いのサイクリングロードを四季折々の風を感じながら走るのには実に爽快である。道々、田で働く農夫や、ウォーキングする人、愛犬と散歩する人などに出会う。爽快な気分を促されて挨拶を試みるのだが、まず80%は返つてこない。つまり、「山賤」ならずとも甲斐の人々は常に「頤」を閉じているのである。どうも甲州のように、盆地で身辺は一族一家みな知り合ひのような世界に住んでいると、よそ者と身内の区別が截然としてゐる。だから芭蕉の言う「葎」は、甲州人の胸中に根深く生えた「心の藪」なのではないか。